

第4回 武蔵野市子ども自然体験委員会

日 時：平成16年3月4日（木）
18時30分～21時00分
場 所：武蔵野公会堂 第1会議室
出席委員：安藤委員・石井委員・梅田委員・川住委員・鈴木委員
高石委員・永田委員・宮寄委員・藁谷委員
武蔵野市：事務局 子ども家庭部長 ほか11名

1. 開 会

2. 連絡事項

梅田 委員長

まず、連絡事項として『長期計画の討議要綱について』を事務局からご説明願います。

（事務局・児童青少年課長）

お手元にお配りいたしました資料は、この委員会の意義としている「第4期基本構想・長期計画」の『討議要綱』から抜き出したものです（冊子については3/15以降郵送にてお配りする）。

まず『長期計画』自体が、今年の9月に『最終案』を策定する予定で、この『討議要綱』は、第三期長期計画の実績評価や今後取り組むべき課題など、第四期長期計画策定に向けて討議すべき素材を、策定委員を中心に取りまとめた、これからの議論のもとになる「たたき台」といえるものです。そして、4～5月に本委員会のような「テーマ別市民会議」など多方面からのご意見をお伺いし、6月には『計画案』を策定いたします。その後、改めて市議会全員協議会や市民ヒアリングなどの手続きを経て、9月に『最終案』が完成いたします。最終的には今年の12月議会にて議決をして、平成17～26年度までの10年間を計画期間とする『第4期基本構想・長期計画』になります。

今後の10年を考えるにあたって、市政を取り巻く状況の変化に関しましては、本委員会に関係する事柄については、「家族で食卓を囲むこと

が少なくなり、コンビニやファーストフードに頼る食事など、食全体がどうかなってしまっている。家族で囲む食卓が、昔は重要な『コミュニケーションの場』であった。」といったことや、「少子化に伴い、一人っ子が増え、家にこもってテレビゲームで遊ぶなどリアリティーのない世界で過ごすことが多くなると、他者とのコミュニケーション能力が低下し、体力のない子どもも増える。」、また「都市化とともに、遊び場が減少し、子どもたちの遊び場がなくなってきています。」といった問題提起がなされています。

先日の議会でも市長の問題意識として、「昔は戸建て住まい。庭があり、その向こうは雑木林で、空き地もあり、いろいろな工夫をして遊んだものだ。ところが今の子どもたちは、都市化の中で一步外へ出れば、狭いベランダしかない家庭が大半である。友達の家遊びに行くとしても、友達と遊ぶのではなく、友達のゲームソフトで遊んでいる。そういった中でコミュニケーションのとれない子どもが、次世代社会を担う大人になってしまったら、いったいどうなるの？ という問題意識があります。」これに対しては、「すぐにできることと、『戦略的課題』というように長いスパンをみてやるべきものがある。」とのことでした。

今度はお手元の資料より、

< 計画策定の基本的コンセプト >

『子育て・教育』:「言語と教育」

「今やコミュニケーションといえば電子機器上の文字や記号のやり取りが一般化していますが、その反面、文字にならない生の感情や思い（非言語的世界）がどんどん切り落とされます。しかし、言語化の困難な領域にこそ生き物としての人間の一番深刻な問題が潜んでいます、同時にそこには、人間の豊かな生命力の源泉も存在しています。ですから、この領域に関わる能力とその教育にも注目する必要があります。結局、言語教育は「身体・自然」と一体として扱うべきだということになります。」

背景:「『生きるリアリティー』が欠けているのではないか？」

『子育て・教育』:「家族の役割」

「例えば親から子へと、言葉以外の伝達方法も交えながらじっくりと大切なものを伝えることができた共同作業の場と時間は、もうか

なり前から無くなっています。また、その中で一人ひとりの違った感性がそれとして認められ、共同体の安堵感（いわば「和」）を体験し、コミュニケーション能力や社会倫理を学ぶ場をなっていた一家の団欒も得難いものになってしまいました。これは子育て・教育を考えるうえで重大な問題です。このあたりで家族の役割のアウトソーシングの意味を見直し、その功罪を考えてみる必要があります。」
問題提起：学校まかせ、その他の機関まかせでよいのか？

< 『子育て・教育』の個別施策のフレーム >

「自然体験の体系的推進」

キーワード：・「子どもの実体験不足を解消」

- ・「各年代別だけでなく、子どもたちがそれぞれに合った自然体験活動ができる」
- ・また、子どもの技能や感性を修得するには、それなりのやり方がある。

「身体・言語・自然」を重視した教育の推進

セカンドスクールの充実やプレセカンドスクールの全校実施、身近な自然を活用した体験学習など。

< 『環境・市民生活』の個別施策フレーム >

緑豊かな都市環境の創出

キーワード：・特色ある公園づくり。

- ・環境教育の充実。
- ・ボランティアリーダーの育成。

身近な自然の回復と保全

環境問題を地球規模で考え、身近な場所から実行していくため、市内の水と緑のネットワークを形成する仙川水辺環境整備事業（仙川リメイク）やビオトープ整備事業をさらに進めていきます。

多摩地域の森林の保全と活用を目的とする「二俣尾・武蔵野市民の森」事業を継続して実施するとともに、子どもたちの自然体験活動ができる場として活用方法をさらに研究します。

これらが現在課題となっている『第四期長期計画・討議要綱』の概略でございます。

梅田委員長

ただいまのお話しは、市が認識している課題・問題点・方向性というようなものの『イメージ』を書いたもののご説明でした。我々としては、それをどのように進め、あるいは欠けているものとは何か？ ということ提言していく、ということです。

それでは、前回よりの『ビオトープ』の件についての担当課よりのご説明です。

緑化環境センター課長補佐

前回のご質問がございました「『ビオトープ』の理念」や「平成16年度の『水と緑のネットワーク整備事業』」に関わる予算の内訳について、ご説明いたします。

まず『ビオトープ』関係の予算です。平成16年の予算総額は、11億5200万円。うち約9億7800万円が用地買収費用で、一つは現在の「グリーンパーク緑地」の拡充整備として、隣接する農地等を買収するための費用、もう一つは関前5丁目に大きな都市計画公園の網がかかっておりまして、すでに生産緑地5000㎡を土地開発公社の施行買収をしておりますが、その残りの4000㎡を買い戻す費用が大半でございます。

それと実際の施設整備の工事費関係ですが、公園・遊び場に関わる費用が1億2000万円。予定の7カ所のうち、新設公園としては境の「都立青年の家」の跡地が、今年度に用地買収が済み、来年度は約6500万円かけて施設整備を行ない「境山野緑地」となります。残りの6カ所は既存の公園のリニューアル費用でございます。

また「仙川水辺環境整備事業」につきましては、川の改修工事費用を約2600万円。また『ビオトープ』は約1700万円。「学校ビオトープ」は大野田小を除き、一応の整備されていますので、吉祥寺北町3丁目に市で所有している苗木畑を新たに『ビオトープ』として整備して、一般的に開放いたします。その利用方法は、現在ビオトープに関わる団体が徐々に立ち上がってきた状況の中で、それらの情報交換等のできる活動拠点としての建物を作る計画をしております。そして「グリーンパーク緑地」の工事費として約1100万円が内訳となっております。

次に、千川上水と玉川上水の管理の件です。現在はどちらも東京都の管理ですが、平成17年度より市へ移管となり、特に西東京市、練馬区境の千川上水についても、武蔵野市が緑を守っていきます。ちなみに仙川につ

きましては、一級河川として東京都が管理しておりますが、市も整備や管理もでき、占用して緑地を作っている場所もございます。

「学校ビオトープ」につきましては、平成9年に「緑の基本計画」にて『水と緑のネットワーク』を作成し、緑の少ない武蔵野市において、緑を作り出す場所として、市内に均等に配置されている学校施設を緑化し「地域の森」を目指しております。学校に自然の生態系に配慮した『ビオトープ』を設置し、環境学習等にも活用できるようにと、平成10年より整備を開始しました。今年度末で、小中学校における『ビオトープ』の整備は完了しております。

最後に、2年毎に日本生態系協会が主催しております「全国学校ビオトープコンクール」がございまして、平成13年度には市立第五小学校が奨励賞を受賞。今年度も市立井之頭小学校が同じく奨励賞をいただきました。

梅田 委員長

土地買収費が、非常に高いんですね。それで区部ではお手上げで、新たに公園等を作るのを諦めているところがあるますよね。武蔵野市のこの「緑地を確保するんだ」という強い姿勢と、比較的良い財政状況が可能にさせるのでしょうか？ また、公園は偏在してしまう可能性がございますが、「学校ビオトープ」は良い考え方で、校庭の一部での生物観察や育成など、非常に大切な土地ということになっていますね。

緑化環境センター課長補佐

ちなみに「学校ビオトープ」は約200～300㎡で、他に土地を求めて作ろうとしますと、吉祥寺地区では200㎡級『ビオトープ』が約1億円、武蔵境地区でも約8000万円かかります。ということもあり、学校の敷地の一部を活用しようというのが、最初のキッカケでございました。

3. 議 題

梅田 委員長

それでは、議題に入ります。前回に各委員から出されたご意見等を、事務局で『図』にしたものがございますので、説明願います。

児童青少年課長

先日、お送りいたしました『図』と『キーワードまとめ・今の武蔵野市

に住む子ども達の現状・不足点』についてご説明いたします。

図： 前回の委員会で出ました『図』をそのまま清書した形となっております。縦軸に年代を、横軸につきましては「このような効果が得られる」・「自然のいろいろな体験を通じて身につく能力や力」を大きく、我々なりに整理したものを横軸とし、現在の武蔵野市の事業を表したものです。

○横軸・『人間関係能力』（家族・コミュニケーションなど）

- ・『技術』・『ノウハウ』
（ナタ・ノコギリを使うなど基本的な技術）
- ・『創造力』・工夫する力
（遊びを工夫する力など）
- ・『達成感』・チャレンジ
（高い山に登るなど普段できない、しなかったことに対する達成感とチャレンジ精神）
- ・たくましく生きる力・心の強さ・へこたれない
（大自然に放っとかれても、トイレがなくても、虫だらけでも生きてく力。）
- 『生きるリアリティー』
（『暑い・寒い・痛い』などの体験）
- ・『感性』・生に触れる・五感が研ぎ澄まされる
（都会の生活ではなかなかできない体験、田舎の匂い、谷川のイメージなど）
- ・自然の知識・環境学習
（自然に関する知識がいかに我々の生活に役立っているのか）

まず、議題の としましては、『軸』は、これで良いのだろうか？ これだけなのだろうか？ ということをお話いただければと考えております。

「他に『軸』として考えられるのは？」として

日常 非日常 （どこでやるのか？）

イベント 単発 継続

強制（学校） 自由（家族・地域）

といったものも考えられるのではないかと挙げております。

そして、この委員会の最終的な目的とする、「こうしたことを一まとめのフレーズでくくる」というところまで。ためしに『生きるリアリティー』として掲げておりますが、こういった様々なベースでの体験を通じて、さ

らに「～のための自然体験」とか、最初の一行目に「××なのだから○○である」というような部分があると、体系に一本筋が通り、すっきり見えるという気がいたします。これは非常に難しいことですが、今後の課題となると思います。

『キーワードまとめ』

： 今の子ども現状として、都会生活の中では放っておくとこんなことができないから、「大人がいろいろな形で用意しなければいけないもの」、「場だけ与えて見守っていれば良いもの」、「一緒に手伝ってやらなければならないもの」などを考える必要ということ、を、まとめたものです。

以上の項目が欠けているものがあったり、表現方法が違ったりということもあるかと思しますので、これを「たたき台」として進めていただきたいと思えます。

また、全体をざくっと見た印象や感想という切り口からお話しいただくと、今後も楽かと思えます。

梅田 委員長

これらの『図』は、前回話し合ったように、現在、市が実施している25事業に限るのではなくて、「自然体験に求めるものは何か?」「どのように?」「どんな場所で?」ということをもとめたもので、横軸に「求めているもの、狙っているもの」を置いているわけですね。

現在は核家族化になり、例えば、コミュニケーション能力の不足がみられると言われていています。ただ、子ども達を大自然に放っておけばそれらの能力が向上するという訳ではないし、放っておけば草木の名前や性質を覚えて、他との違いが分かる訳でもありません。子ども達は可能性を持っているのだから、放っておけば自然に学ぶのだということは、また別の話として、目的によっては自得しなければならないものもあるし、習得しなければならないものもある。そこで、これらの『キーワード』を基にベースを合わせるような形で、「『自然体験』ではどう育つ?」「どのような場で」「どのようなことをやったら良いのか?」という話し合いを進めていきたいと思えます。

例えば藁谷委員のやっていることは、30泊のキャンプなど、ある意味「究極」で「何かしないと生きていけない環境」でございます。やはり、それなりの『プログラム』・『場』・『時間』なりが必要なのではないでしょうか?

藁谷 委員

いろいろと効果がダブってくるので、「これに対して効果がこうある。」というものが分かりませんが、いわゆる「『生活（衣・食・住）』がシャッフルされたような体験」が必要かなとも思います。つまり、家族とも言えるような「共同生活」です。30泊のキャンプでは、『生活』がメインとなります。

永田 委員

私も参加した『ハバロフスク100人キャンプ』では、特に過酷な場所へ行ったグループは、指導者が意図的に・計画的にということは別として、それぞれが工夫せざるを得ないような『環境』・『場』・『時間』でした。

石井 委員

どうしても、方法論の方に行きがちで…。まず今は、「何を育てるか？」「足りる？足りない？」というところの議論をしましょう。ただ、このような議論をしますと、机上論になりかねなくて危険なのですが、それぞれの委員さんが持っている経験等のなかで「こんなものが『自然体験』によって育つのではないだろうか？」ということが、見えていると思いますので、とりあえずは「足りる？足りない？」の話をした上で、「〇〇を育てるために、事業をしますよ。」という言葉で委員会としての定義をつける形で良いのではないかと思います。

児童青少年課長

全くその通りでございます。前回、各委員からでた言葉一つ一つについて「違う・違わない」をやると、時間がかかりすぎ、どこかの大学で研究させた方が良いでしょう。またあまりに専門的な言葉を使ってしまうと、一般に向けて発信したときに混乱してしまいます。「『自然体験』を通じて身につくもの」として、今まで出てきた考え方がどうであるのか？ 表現はどうであるか？ など、「『キーワード』の再認識について」議論していただきたいです。

永田 委員

つまり市として取り組むべき「最初のお題目」を考えればいいのですね。今まで出てきたのは、少しずつ言葉が違うけど、全部その通りだと思います。

安藤 委員

配布された資料を見て感じたのは、『創造力』という言葉に加え、『想像力』も必要なのではないのでしょうか？ 子ども達が、学校の教科書での「谷川の冷やりとした水」や、絵本の情景のイメージができないという話からは、実体験に基づく『想像力』を培わせる必要があると思います。実体験が豊富にあれば、それに伴う『想像力』も強くなるはずです。これも『自然体験』から得られるものの一つだと思います。

梅田 委員長

ここで挙げられているキーワードに、今まで自分が意図してしゃべってきたことと違うなと感じたことがありましたら…。

藁谷 委員

先程でてきました『生活能力』あるいは『生活』というキーワードは、ここでいう『人間関係能力』や『技術』に近い項目なのかなと思います。金銭感覚等はまた別で、いわゆる「原始的生活能力」といっていいのでしょうか…。

児童青少年課長

問題意識はそこだと思います。スイッチ押せば何でもできてしまうことが、絶対にいけないとはいえませんが、現代はそれがなくても、やっていけてしまいますから…。

藁谷 委員

そうすると『意識改革』みたいのが必要になってきますよね。「環境教育」にしる「環境問題」にしる大人も子どもも『意識改革』がされれば、変わるのではないかと思います。もっと『シンプルライフ』にしようとか、もっと意識が変れば、今のことが全部合致してくるはずですよ。

石井 副委員長

違う『シンプルライフ』なんですよ。かつて『シンプルライフ』を求めてきて現在に至っている。昔は、ちゃんと育ってきたもので、人間性として求められているものが、欠如してきてしまった。

藁谷 委員

ここで挙がってきている『キーワード』などを、『自然体験』の中で体験することによって、「意識がかわる」「行動が変容していく」というのが求

めたいゴールでありますよね。「体験する」がゴールではなくて、「体験したから、行動が変容する」というところまでです。

川住 委員

私は、「予定調和型の体験」というものをあまり評価しておりません。例えば、今の学校教育の場や市・他の団体がやっている『自然体験活動』の中にも、場合によっては、「予定調和型」のものがあるのではないのでしょうか？ 藁谷委員と同じように「体験=全て」ではなくて、体験によって変わることを期待して、そこにある程度『時間』と『場』に自由度を持たせつつやってみる。それは、事業の泊数の問題ではなく、事業中の自由時間を長く設けてみるなどで達成できる部分もあるかもしれませんし、そういう考え方をもうちょっと『意識改革』して、模索してみても良いのではと思います。特にここでいう『人間関係能力』や『感性』『自然の知識』については、子ども達に『時間』と『場』の自由度を与えて、自分らで考えて自然を勉強、または自然から勉強させてもらうことが必要であると考えます。

鈴木 委員

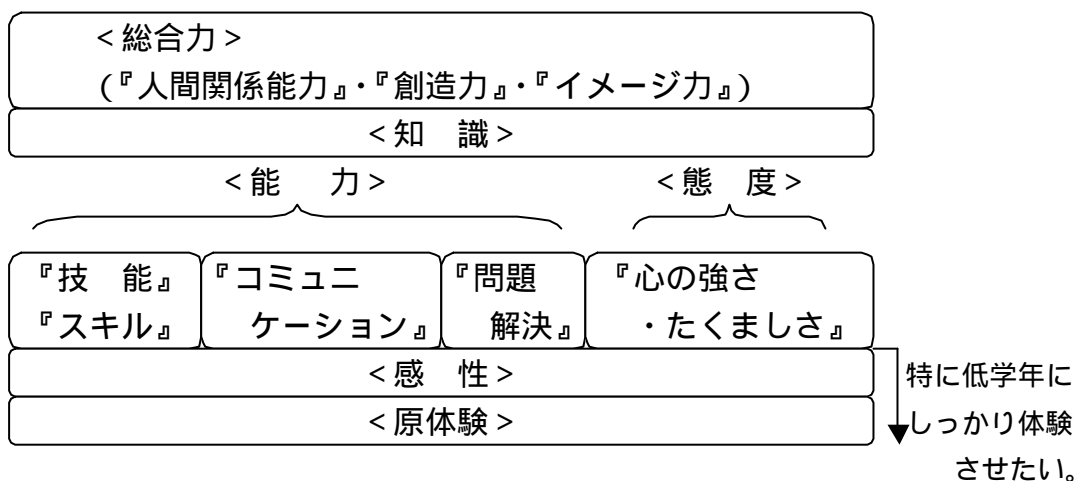
となると、この『キーワード』の横軸は、お互いに育つ相互関係の印象があって、矢印のつく関係ではない気がします。グルグルらせん状になって、いろいろな力が高まるといいますか…。例えば、何か達成しようという目的があれば、その目的に適した人数のグループができて、所属する子ども達が同じ目的のために何かをやると、必然的に『コミュニケーション』が生まれ、こういう『もの』や『技術』が必要だということになるということです。それぞれ、もっとスッキリとした言葉でくれないかなと思います。『能力』だとか、『技術』、『感性』、『知識』の部分だとかで。

石井 副委員長

おそらく、様々なカテゴリーや切り口のものが全部並んでいる状態なので、分からなくなるんですね。少なくともこのベクトルは全然意味を持っていない。「抜け」を探すための方法論という目的だけで、階層化させることも良いのかなと思います。

ちょっと図にしてみますと、藁谷さんたちがずっと携わっていることなどを『原体験』として、次に『感性』という部分が基盤にある。その上に『技能』『スキル』とか『コミュニケーション』、『問題解決』というような<能力>レベルの部分と、『心の強さ・たくましさ』という<態度>レベルという部分がある。さらに高位なところに<知識>レベルがあり、そのま

た上に『人間関係』やら『創造力』『イメージ力』の<総合力>的なレベルがのっかってくる。なぜなら例えば『人間関係能力』をみても、この下位レベルの<能力>面や<態度>面、そしてある程度の<知識>を含めながら育ってくるものだと思います。とりあえず階層化してみましたが、今の『キーワード』はいろいろなレベルで入り込んでいるのです。だから分かりにくい。ちなみにこの整理の仕方は、教育学的な考え方で、学校教育は評価や目標の問題を、態度面・能力面・思考面・知識理解面で整理いたします。それで今回の『自然体験』のレベルで整理をすれば、これに入ってくると思われ、「抜け」は埋められるのではないかと。ただ私達が議論をすると、相対論的な部分、総合的な部分がよく出てきてしまいますよね。



この構造を『方法論』へ持っていくときには、<感性><原体験>部分ものを、特に小学校低学年でしっかりと体験させておきたい。特に<原体験>レベルのものは元兵庫教育大の山田卓三氏らが提案したものと考えます。<原体験>レベルのものは、ある程度年齢を重ねからやってもダメだと言われています。例えば「におい」をかぎ分ける感覚などは、幼児期にいろいろと体験させて、感覚的に味わっておかなければならないと...

梅田 委員長

非常に面白いですね。このようにしてみますと、はっきりと構造が見えてきます。

石井 副委員長

前回の『形式知』『暗黙知』というものは、また違う切り口ですね。あれは『方法論』とは違うレベルでの獲得する過程の切り口です。

川住 委員

「精神面」や<態度>面になるかと思うのですが、『人を思いやる心』や『優しい心』という項目もありますね。また<感性>に入るかもしれませんが、『面白い』や『楽しい』という項目も、『自然体験』で育まれる大きな要素であると考えられます。

高石 委員

また『人を思いやる心』や『優しい心』という項目を、『心の豊かさ』とするのも良いかもしれません。

梅田 委員長

まあ『自然体験』は全てを受け入れていますので、充分大きな要素でありますね。『人を思いやる心』などは、実は団体競技においてでも育まれるはずなのですがね。「家庭でも学校でもできません」とアウトソーシング的に全て『自然体験』にきている。それを全部できるのか？ という問題も出てきます。

石井 副委員長

今の『思いやり』とか『心豊かな人間性の育成』の話は、実は「心の教育」という形で、東京都の教育課題にもあるのですが…。その部分は、上位レベルで入れていかないと説明つかなくなると思います。そして上位レベルのところは、もうイジれない。『面白い』や『楽しい』ということも低いレベルの<感性>と高いレベルの<感性>にあると思うんです。例えば『自然体験』をはじめて味わったときの「この蝶々はキレイだ。自然はすごい、面白い。」というレベルの<感性>と、そのレベルを経て、いろいろと知った上での「こんな仕組みもあるんだ、だから面白い。」というレベルの<感性>も、という具合に『面白い』のレベルもいろいろありますから、ある程度はこのあたりの図で整理してしまった方が良いと思います。

このような形で議論が進むと、最後に「スパイラルになっています。」になる。この手でよく教育が逃げるんですけど…（笑）。そこに年齢段階の目標があるから説明ができます、とか。

藁谷 委員

私のグループは『自然体験』を長年やってきていますが、その考え方・コンセプトのお話をさせていただきます。実は、私達も「予定されたプログラム」をたくさんやってしまいます。それは、期間が決まっているか

らで、30泊のような長時間の事業ばかりではありませんから、仕方のないことです。「1泊2日でも日帰りのキャンプであっても、＜感性＞＜原体験＞は大切なのだ、だからたくさん連れ出そう」と考えております。そこは、「予定的」であっても良いと思っているところもあります。

うちに所属している指導者に対して、「ハイキング」や「野外炊事」などのプログラムをやるときに、子ども達を指導したり、接するときに注意してほしい項目として挙げている事柄も、この『キーワード』と通じるところがあります。

コミュニケーション（人の意見を聞く、ケンカしても仲直り など）

自己表現（「もっと大きな声で！」、「イヤだ」もはっきりと など）

自主性・自律性（進んで手伝い、リーダーシップをとる など）

思いやり（ハイキングで遅れた子どもに声をかける など）

積極性

礼儀・しつけ・道徳心

この辺のところを、どんな活動・場面においても気をつけて、子ども達に接するようにと指導しております。

石井 副委員長

『礼儀・しつけ・道徳心』は、「こういう人に対しては、こういうことをしなければならぬ」と作法・マナー的に考えると『習得技術』でもあり、挨拶の仕方にしても、最初は『技能』として、教えてやらなければならないものでもあります。まあ野外活動だけではなく、家庭でもやらなければならないことだと思います。しかし、野外だからこそ他人から素直に学べるという見方もできます。

生涯学習スポーツ課長

ひとつ質問してもよろしいでしょうか？ 生涯学習など『自然体験』に限ったことではないのですが、子ども達が「夢中になっていく」「気持ちがトランス状態になる」「心が開放される」という状況があるのですが、そういったものはどういう位置付けになるのでしょうか？

石井 副委員長

それに関しては、『動機付け』という部分だと思います。先程の『討議要綱』の「(2) 個人の自立」にも記述してあるようですが、『内発的動機づけ』というものです。最初のうちは「リーダーから飴をもらえるからやる」というところから入ったとしても、きっと先に「こういうことになる

だろう」という見通しができてきて、「もっとやってみよう」となる。整理した図から言うと<能力>的なところに入ってくるのですが、『興味・関心』的な<態度>的な面もあります。

川住 委員

この話に関係するか分かりませんが、ある心理学者による『フロー理論』『フロー体験』というものがあるますよね。「高い山にどうして登るんだ？」「そこに山があるからだ」ということを論理的に考えたもののようですが、登山をしている人がある時点を越えると、何か浮き上がって押されるような「フローティング」の心境に陥る。そこに『内発的動機付け』と似て、「発見する喜び」や「新しいことにチャレンジする喜び」という『心の報酬』と呼ばれるものがありますが、「夢中になる」ということもそこに分類させるものではないでしょうか。そういったものも入ってくると良いと思います。上位概念かもしれないし、もっと身近なものかもしれない。

梅田 委員長

『心の報酬』には、いろいろな種類があって、例えば「好奇心」から「心の充足」、そこから「探究心」へと変わっていくサイクルがある。自分の体験ではそうでした。『心の報酬』には知識の面もあれば、「人に尽くしてもっと...」というボランティア的な面もある。

永田 委員

余談ですけど、登山家に当てはめるのは間違いですね。登山家はそんな風に1回は成功するらしいですが、後は死にます（笑）。登山家は、あらゆる状況を判断する「冷静さ」が必要です。そうでなければ生き残れない。それでも「どうして登るの？」と言えば、自分なりのモチベーションの高さですね。『内発的動機付け』や『心の報酬』に関係しますが...

藁谷 委員

今の状態は、家庭・地域・学校など非常に交錯している状態でまとめにくい。「これをやれば、全部獲得できるだろう。」ということではなく、子どもの成長時期にすごく長いスパンで考えなければならない。行政がやるところに集中して考えていくのか？ 「家庭教育でああしなさい。こうしなさい」というところにまで踏み込むのか？ この辺も整理しなければならない。行政的にできるのであれば、この時期にこれ、この時期にこれと、子ども達が将来良い指導者や、親になるために、「この時期にこれ、その時

期にそれ」と、行政的にできることを考えなければならない。

石井 副委員長

この長期計画に対する提言というのは、行政施策としての事情を報告するためだけではなくて、次の事業を組んでいくことが、結果的に次の人材を育てることになるし、そうすることで、また2代目の子ども達が出てくる。ある面では、そこまで提言していくわけですよね？

児童青少年課長

そのとおりです。また後日お送りいたします『討議要綱』をお読みいただくと良いのですが、今の子どもを巡る家族の状況とか、社会の状況・都市環境がこうなってしまうている。今の子どもたちにとって、これだとダメだと。そして、次世代の社会を担っていく人たちのだから、ちゃんとすべきところは、きちんとすべきである。その方向の中で『自然』との関わりはどうか？ や説き起こしが『家族の有り様』ということが説き起こしですから、強制はかけないけれども、こうあるべきではないか、というところは、どこかで提言することは可能です。

梅田 委員長

考え方としての、一本の大きなキーワードでまとめれば良いのですよね。

永田 委員

こういう『キーワード』で、こういう効果が期待できるので、こういう自然体験をこれから進めていきましょう。これまでの25事業がありますがけれども、こういう効果や期待ができるからこそ、進めていきましょう、ということで今度は『方法論』に入っていく。

鈴木 委員

分かりやすく構造化され、皆さんからも様々なご意見が出されたところで、そろそろ、「いつ頃、どういう場、どういう方法で？」という論理になっていく良いタイミングではないかな、と思いますが、いかがでしょうか？

児童青少年課長

事務局としても、皆様のご意見を聞いてきて、表現方法やくくりはいろいろありますが、ここで概ね書き出されているのかな、と考えております。それと構造化の図を参考にして、「原体験を通じて、〇〇ができる」というように、もう一步消化しやすく、行政的に整理したいと思います。

もう一つ<原体験>でも、「幼いうちにやらなければならないこと＝ムシにやさしくしましょう など」や、「青年期でないと意味がないこと＝友達と助け合おう など」というように、年代によっても変化させられるのかなとも考えました。そのようにしていけば、『キーワードまとめ』的なものは求められ、図もバージョンアップさせ、『方法論』の話もできるのではないのでしょうか。

子ども家庭部長

そうですね、また事務局の方で「たたき台」を作成しまして、それを次回に叩いていただくという形で、最後までいきたいと思います。

梅田 委員長

それでは、『方法論』を含めた議論に入っていきます。まず川住委員と宮崎委員・藁谷委員から資料がでておりますので、ご説明をお願いいたします。

川住 委員

少しばかり先走りかも知れませんが、私が新しい野外活動事業として考えたものを3点ほど説明いたします。

親、教員、地域活動ボランティアのための野外活動

1. 対象：親、教員、地域活動ボランティア
2. 目的：子ども達の野外活動支援をより効果的に実施するため、指導者の能力向上を目指す。
3. 内容：野外活動の基本～応用、他団体活動実査 等
4. 既存事業による代替可能性：親子棚田体験、土曜学校、二俣尾、自然クラブ
(こういった要素を持っている。)

まずは「リーダーの養成」という中で、『親』をキーワードに含めて見ました。「親がもう少し努力をしなければならない。」とっております。特に『父親の努力』がもっと必要で、「忙しい、忙しい」ではなく、子どもの成長や教育のためには、少しぐらい残業を削ったってやる意義はあるのでは？ ということです。そのような意味で、そういう『時間』と『場』を

行政の方で優先的に設けることができれば、と考えております。また教員の中にも地域指導者の中にも、『自然体験』活動に関してはアマチュアの方も当然いますので、プロにはならないまでも、基本的な知識・リーダーシップ等も学ぶことができればと思います。

市内野外活動

1. 市民全般
2. より身近な自然の中で野外活動を行なうことで、
従来にない参加者層の拡大。
野外活動の基本を学びつつ環境教育、
食育等を効果的に実施する。
3. 野外活動の基本～応用、環境教育、食育 等
4. ムーンライトステイ、親子どろんこ体験、土曜教室、
親子野遊びクラブ、自然クラヴ、関前公園、
二俣尾市民の森、ビオトープ

もっと身近なところで『野外活動』ができるのではないかと考えた。そういった意味で「何ができるか？」というと、身近にサンダル履きで行けるようなところですから、「野外活動の基本」というべきものをやります。その他「環境教育」、「食育」も身近な話題として取り上げると良いと思います。

自然科学志向型野外活動

1. 市民全般
2. 自然科学教育の原点である、自然観察（動植物、地形、気候など） 考察、実験、検証を自然の中で行なうことで実践的な自然科学知識の習得と知的好奇心の向上を目指す。
3. 例えば
自然の村内の動植物、地形、気候を観察、測量、記録し、
地形図・気温データベース・動植物図鑑を作成。
自然原料をつかった道具、工芸品の製作。
「火」をテーマにした各種実験（「火の面白さ・恐さ」など）。

4 . ジャンボリー、ハバロフスク関連 2 事業、移動教室、
セカンドスクール、プレセカンドスクール、
親子の遊びクラブ、自然クラブ

仮に「自然科学志向型」としましたが、自然を観察し、そこから何かを学び取る、考えたり、実験・検証したりと「自然科学知識」というものを実践的に、好奇心をもって習得していく『場』があればと思います。例えば『自然の村』の中などで実施できればと考えます。

石井 副委員長

この切り口と全体の構造の関係を整理すれば方法論が整理できますね。

梅田 委員長

他にご意見がある方いらっしゃいますか？

安藤 委員

今の川住委員の資料を見てご説明を聞いて、モヤモヤ感じていたものが、すごくスッキリしました。なぜかというと、市のたたき台の図には『むさしのジャンボリー』と『セカンドスクール』が同じ土俵にあったからでしょうか…。「学校でやっているもの」「地域でやっているもの」というだけでなく、同じ土俵に置いて欲しくないという気持ちもあります。そして『ジャンボリー』のように、「親、教員、地域活動ボランティアのための野外活動」にも「自然科学志向型野外活動」にも充分入ってくるような事業が多くあると思います。

また＜原体験＞が、小学生 1～3 年生の部分でもっと入ってくれば良いと思います。『ジャンボリー』や『セカンドスクール』が大勢で参加できるのに対して、その他の事業は 20～30 名定員で実施しているなど、＜原体験＞を一番してほしい人達へのアプローチが少ないと感じています。

最後に、そして「父親の参加」の件ですが、これだけの事業があることを、どれだけの親が受け止めているのでしょうか？ チラシを学校経由で家庭に配布していたとしても、子どもが親にチラシを見せるということは、年齢があがるほど少なくなっていくもので…。PTAの方でも、兄弟姉妹

のいるご家庭への大事なお手紙は、必ず低学年の子に持たせます。そういう点で、「親に届くチラシ」「親に見せたがるようなチラシ」を作成するなどの努力もしてほしい。また、二次的に「もっとアンテナを立てておくんだよ」とか「気づいて」というアプローチをするためにも、『親への啓蒙』の意味でも「親、教員、地域活動ボランティアのための野外活動」を強化していただきたいです。

梅田 委員長

先程、話にも出ました『幼体験』のことですね。『生活基本技術』というか、冷たいとか暑いとか、物の使い方、谷川を見た、という『基本体験』のことですね。

それでは、宮崎委員お願いいたします。

宮崎 委員

私が第1回のお話した「自由に遊べる施設」が、『プレーパーク』というものだと分かりまして、その資料をお持ちしました。「子ども達の好奇心や欲求を大切にし、やりたいことをできる限り実現される『場』」として『冒険遊び場』とも言われています。そこは、地域の父母たちが『プレーリーダー』と一緒に直接運営にあたっている施設です。世田谷などにもしっかりとした施設があるということで、事務局と相談したところ、現在市役所内に『プレイパーク研究会』という職員ワーキングチームによって研究されていて、4月に報告書が出されるということです。このような『場』が身近な市内に、またこのような考え方が取り入れられればな、と思っております。私も実際に見学した訳ではありませんので、見学もしてみたいとも思っています。

梅田 委員長

藁谷委員からも資料が出ておりますので、ご説明願います。

藁谷 委員

私がまとめてみたものは、切り口は『継続』といいますが...、単発のイベントではないということです。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 自然体験地域センター（仮称）設置（全員が等しく学ぶ（体験する））<ul style="list-style-type: none">・ 授業時間の一部に取り込む |
|---|

教科と同じように「自然体験活動」を時間割に入れる。

- ・全学年設定をする。
（例：金曜日の5時間目、全学年で）
- ・指導者は地域の多方面の農業従事者、林業従事者、自然、環境をキーワードに経験豊かな人や年配者等に先生になってもらう。
- ・空き教室に地域センターの職員室を設置（校長室も？）
地域の先生がいつでもいて、子どもが休み時間等に気軽にいけるようにする。

1つ目は、全員が等しく学ぶ・体験するということで、学校の授業の「国語」や「算数」と同じレベルで『自然体験』をやります。学校教育にどっぷり突っ込むということで、今は「総合学習」とかがあるので、そういう意味ではできるのではないかと思います。

2. ビオトープ スクラップ&ビルド

- ・ビオトープの利用を自由にする（何も制限しない）
- ・ビオトープの生態系が維持されずに、状態が悪くなった原因を突き止め、再生に向かわせる。また、最初からやり直させる。
- ・維持するだけでは、ビオトープの意味がない。
- ・利用しながら循環を繰り返す。その繰り返しが体験の場になる。
- ・そのための教員の研修も必要。

前回の『ビオトープ』の話題で、「利用されていない」とかありましたが、そうならば早く壊してしまえばいいと思ひまして、思い切り利用させて遊ばせたいと考えております。学校の児童500人が『ビオトープ』で遊ぶと当然に壊れるので、「何で壊れたのか？」という原因を突き止め、もう一回再生する方法はどうなのか？ ということを繰り返すということ大胆にすれば良いのでは、と考えました。

3. 通学合宿（来たい子が選ぶ、自由意志）

- ・地域の公民館や青少年施設（野外活動センター等）など公的施設

から1週間、1ヶ月、1学期単位で学校に通学する。

- ・異年齢が、生活体験、集団生活を経験する。
- ・夕食後の夜には『自然体験』を中心に活動する。
- ・土日には家に帰る。
- ・施設に宿泊生活を面倒できる指導員やボランティアを常駐させる。

これは、来たい子が来るという「自由意志方式」で良いと思いますが、例えば、青少年施設等の公的施設に、小・中・高校生がある程度の期間を親元から離れて集団生活し、そこからそれぞれの学校へ行くということです。

4. 一年間の自然教室

(チャータースクール)(来たい子が選ぶ、自由意志)

- ・新しいタイプの学校
コミュニティスクール(地域が運営に参画する公立学校)
- ・市で校長や教員を募集など、地域の方々の協力をたくさん受ける。
- ・1年間に及ぶ寄宿生活
- ・学校の授業の1/3(60~70日程度)
野外教育プログラムを実施。
- ・山村留学の武蔵野版 都心に近い立地を生かす
何も山村だけが良いものばかりではない。

イメージは「山村留学」です。『野外活動の学校』という感じで、もちろん授業もちゃんとします。例えば長野県川上村の『市立自然の村』に寄宿して、学校の授業もし、マキ割りもし、という考え方です。

児童青少年課長

今、議論が「どうやって？」の方向へと来ているような…。川住委員や藁谷委員からあったご提案を持ち寄ってきて、というような形で行きたいですね。

梅田 委員長

気になりますのが、「『達成感』はどのプログラムで？」というような詰めをしておかなくて良いのでしょうか？

永田 委員

人によって、全く対応が違うので、改めて強調する必要はないのではないのでしょうか？ ムシ採ったり、魚採ったりで、こだわらない方が良い。それはそれぞれの個性で、将来何かに生きれば良い。むしろ『場』をどうするのか？ を考えなければと思います。

梅田 委員長

ぼやけないでしょうか？「25事業のどれが効果あるのか？」「もっと効果的なやり方」等を考えるときの『ものさし』が必要なのでは？

永田 委員

25事業それぞれにノウハウがあると思います。その指導者のノウハウが、共通認識として常時情報交換できるような『場』があれば、『達成感』の方向に向かっていくかもしれない…。

石井 副委員長

『目標』がはっきりすれば、『効果』も分かるでしょう。『達成感』はむしろ個人レベルの話。

鈴木 委員

そう考えると『セカンドスクール』はとても「多目的」で、全部をやろうとしている。予算的にも、時間的にも、学校全員でということでは保障させています。その内容を築くのに10年を要しているので、内容を変更するには、さらに10年を要すでしょう。「子どもが選ぶ」「大人が行かせる」という視点で考える『切り口』も一つの手ですね。

児童青少年課長

すでに再整理が始まっていますね。「スクラップ&ビルド」よりは「新しいものを作っていく」という方向で。評価の視点・考え方を示して、こういう風に見直せば良いという感じでまとめれば良いので、25事業一つ一つ考えていく必要はありません。

子ども家庭部長

一番最初に批判を受けていますので、それぞれの『切り口』で、それぞれの『方法論』で、ご提案を出していただきたいです。もちろんそれをまとめる時には、きちんと連携を考えなければなりません...

例えば『プレーパーク』を考えるにしても、『軸』として「日常で、継続で、自由に」という方向のものを、「市内でやるのか？」それとも「『自然の村』でやるのか？」とうように、『場』を考えていく提案もお願いいたします。

児童青少年課長

「ひとりビオトープ」を持っていた昔と比べ、「今の武蔵野市では、ここしかないから、ここでやる」、そういったものを繋げていくような『場』です。その他にも「家庭でも」や「お金がなくても」、大人が何かを言ってやるのではなくて「子どもが自主的にやれる」というような『場』の提案もしたい。

それでは、今回までの「まとめ」を事務局で考え、それをお送りいたしますので、次回にまた議論して叩いていただくということになりますので、よろしくお願いいたします。

次回の日程について

第5回：平成16年4月7日（水）午後6時30分～

場所：武蔵野公会堂 第1会議室